

CONTENTS

- 洋鐘時計塔の設置 1
- 学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち Ⅶ 2
- 平成29年度淑徳大学アーカイブズ特別展
「『老い』へのまなざし—国家と家における高齢者福祉の歴史—」を観て 5
- 『浄土宗関東十八檀林 大念寺日鑑』—（淑徳大学アーカイブズ叢書7）刊行のお知らせ 6
- 「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内 6
- 淑徳大学アーカイブズ日誌（2018年1月～5月） 7



（現在の時計塔）

— 洋鐘時計塔の設置 —

写真の洋鐘時計塔は、在学生の保護者らによって組織される淑徳大学協賛会が大乗淑徳学園の創立100周年や淑徳大学社会学部社会学科の開設を記念し、平成4年（1992）3月15日の第24回淑徳大学卒業式の日グラウンドの東側（現12号館前庭）に設置したものである。時計塔からは「月影の歌」や「淑徳大学歌」のほか、ポピュラー音楽が毎日定時に流されていた。その後久しく外形をとどめるのみとなっていたが、淑徳大学創立50周年のうちに、装いも新たに中庭と7号館の間の斜面地に移設された。（淑徳大学アーカイブズ所蔵）

学祖・長谷川良信と社会事業の先覚者たち VII

— 恩師・渡辺海旭（下） —

淑徳大学アーカイブズ 所長

長谷川 匡俊

前号では、1916（大正5）年の秋ごろ、長谷川は房総での療養から東京に戻り、翌年正月には渡辺の勧めで『浄土教報』の記者として再スタートを切ったと紹介した。そして同年6月になると、長谷川は自ら音頭をとって宗教大学出身の青年僧侶を結集し「青年丁巳会」を発足させている。発会にあたって長谷川は、

社会に対し、教界に対し、摯実率直なる教界新人の態度を表明せんと欲す。或は猛然として一宗に肉薄すべし。或は時に先輩と争友たるべし。或は挙りて実践に臨むべし。吾人は唯、新人として其の至道一路を行かむとするもの、

と、満を持して『浄土教報』に真情を吐露している。

18年4月、宗教大学（現大正大学の前身）「社会事業研究室」が開設されたことは先にふれた。渡辺や後に取り上げる矢吹慶輝両教授らの尽力によるもので、初代主任には矢吹が就任し、長谷川は理事として迎えられた。爾来、長谷川はこの社会事業研究室との縁深く、やがて主任教授として大正大学を定年退職する62（昭和37）年3月まで40年を超えて関わりを持ち続けた。これもまた恩師の遺志を受け継ぐものである。

社会事業研究室の理事に就任する1か月前のことが、長谷川は東京府から、同府慈善協会第二部主査ならびに巢鴨方面救済委員を委嘱され、スラム地区の住民の生活状況を徹底的に調査した。その結果、住民の困窮した生活事情をつぶさに知った彼は、ここの住民の生活改善を図る運動を始めようと決意し、同年10月初め、「社会事業研究室実地調査部」の肩書はあったが、単身で〈細民地区〉への移住を決行した。場所は大学近くの西巢鴨にある通称「二百軒長屋」（地図上では「百軒長屋」と記される）というところであった。この長屋の様子は、地理学者・小田内通敏の著『帝都と近郊』（大倉研究所、1918年）に詳しいのでそれに譲るが、とにかく建物は貧弱で、長屋内は不衛生極まるものであった。

あえて、このような劣悪な環境に飛び込む決意をした長谷川の心境を物語る手紙が残っている。妹分ともいう



社会事業研究室開設記念展示「社会事業展」
(1918年)

中央に矢吹慶輝、その右隣りが長谷川良信

矢吹輝夫氏所蔵

(学祖長谷川良信先生生誕120年記念展図録より転載)

べき島田こう（幸）に宛てたものだが、その中で、自分の生涯をかけるような仕事先がいまだに見つからない。このところ大阪方面の社会事業関係から仕事の話がいくつかあったが、事情が許さず行くことが出来なかったと言い、最後に、病気が回復しつつあるとはいえ、完全な体とはいえませんが、「生死を度外に置き」貧民生活を喜んでやる決意だ、とある（『長谷川良信全集』第4巻所収）。長屋へ入るほぼ直前の9月18日付の封書だ。

この長屋に移り住んで間もないころのエピソードの一つに、恩師海旭からもらった（無断拝借といった説もある）フロックコート（モーニング）、紋付羽織をはじめ、家財道具のすべてが盗まれるという目に遭っている。これを聞いた海旭は「いいよ、いいよ、またつくるよ」と言って意に介さず、他言することもなかったという。また、これでめげないところが長谷川の真骨頂である。六畳一間の狭い一室を使って始めた不就学児童のための読み書き・算盤の夜学会はたちまち評判となり、子どもの親たちの身の上相談に乗るなど、手ごたえを感じるようになって、活動の組織的・系統的な実行に踏み出すのであった。

19（大正8）年1月、この長屋の一室に事務所を置い

て始まったのが「マハヤナ学園」で、長谷川28歳のときである。施設の名称は渡辺が付けたもので、「マハヤナ」(Mahāyāna)は梵語、人びとを理想郷に運ぶ大きな乗り物を意味する。師弟にとってこの上ない大切な思想の言葉である。長谷川は渡辺がそうであったように、決して一宗一派に収まる(拘泥する)人物ではなかった。浄土宗への愛宗護法の念篤く、しかも大乘主義、大乘仏教精神に徹した生涯をおくっているが、彼の最初の本格的事業施設の名が「マハヤナ学園」であったことは意味深いものがある。

そして学園の創立趣意書によると、発起人に長谷川の名が、創立委員には大河内隆弘・真野正順・木村玄俊・木村良範・伊達保美・柴田徳次郎の僚友6人が名を列ね、学園開設と同時に理事に就任している。いずれも長谷川と同じ新進の学徒で、後年名をなす人たちである。また顧問の中に渡辺の名が見えるのは当然のことで、他に小河滋次郎・千野学誠・建部遯吾・窪川旭丈・高田慎吾・望月信亨・長谷川基・荻原雲来・安達憲忠・椎尾弁匡・三輪政一・大島泰信・野澤俊岡・本多浄巖・矢吹慶輝・茅根学順・三星与市・滝尾道随ら、当時の仏教界・社会事業界・学界を代表するような歴々が名を列ねている。渡辺の後ろ盾に加えて、長谷川への期待の大きさをうかがわせよう。なお渡辺は単に顧問といった名誉職のみでなく、学園の「監督」として迎えられている。

上記趣意書には、学園の事業方針が3本の柱のように明確に掲げられている。(1) 講壇的社会事業の普及、(2) 総合的済貧計画の実行、(3) 労働問題の宗教的解決、である。詳しくは拙著『トゥギャザー ウィズ ヒムー長谷川良信の生涯ー』(新人物往来社、1992年)他に譲るとして、ここにも渡辺が11(明治44)年に設立した「浄土宗労働共済会」の理念とその事業の影響が見て取れよう。ことに総合的施設の必要性や労働問題の教化的解決をめざしているところに顕著であり、それは長谷川のその後の事業と研究を方向づけてゆくことにもなる。ちなみに、この頃の長谷川が労働問題を直接とりあげた論文には「労働問題の教化的解決」(1918年12月)があり、渡辺には、自ら立ち上げ主筆を務めた『労働共済』や『浄土教報』誌上で、この問題を多く取り扱っている(詳しくは拙稿「大正期における渡辺海旭の労働者保護思想ー仏教者として、労働問題の認識とその解決策を中心にー」、圭室文雄編『日本人の宗教と庶民信仰』吉川弘文館、2006)。

*

20年3月、長谷川はマハヤナ学園出版部より自著『社

会事業とは何ぞや』を斯界の誰よりも早く世に問うている。本書はそれまでに彼が『浄土教報』等に発表してきた論稿他を編んだもので、決して体系的な著作とは言えないが、思想的にも実践的にも社会事業成立期における啓蒙的理論書としての役割を果たしている。また翌年には前号で触れた仏教徒社会事業研究会(渡辺・安達憲忠らの主導)からの委嘱に応え、同会編『仏教徒社会事業大観』を刊行している。かくして21年4月、長谷川は宗教大学講師に任ぜられ、「救済事業」を担当した。実はこれに先立つ19年11月、マハヤナ学園の発足した年に芝中学校以来の親友・柴田徳次郎(前掲)が創設した「国士館高等部」(現・国士館大学)の講師に就任している。渡辺の門下生の中には、浄土宗はもとより仏教界の外で活躍した逸材も少なくなかったわけで、以前に紹介した磯村英一もその一人だが、この柴田も同じで、渡辺は同校の設立に際して彼の懇請を受け教授・評議員に迎えられている。恩師と親友のご縁に長谷川もまた馳せ参じたわけである。

さて、機が熟したというべきであろうか、翌22年3月、長谷川は前にも触れた欧米への留学に旅立つのである。この海外留学は本人の強い希望によるとはいえ、海外経験豊かな渡辺や矢吹の勧めや助言があったとみるのが自然であろう。アメリカにおけるシカゴ大学などは矢吹の影響(次号で言及したい)が、ドイツのベルリン女子社会事業学校(現・アリス・ザロモン大学)への留学は、ドイツ留学経験の豊富な渡辺の助言によるものであろう。同校の創立は渡辺が在独中の1908(明治41)年というから、あるいは当時から多少の情報を得ていたかもしれない。しかも、研究テーマに「ドイツ社会政策の基礎的問題」(ヘウス・クナップ教授の指導)を取り上げているところなどは、渡辺の関心とも符合する。

24年8月、ベルリン女子社会事業学校を無事終了すると、予定ではヨーロッパ各国を視察するはずだったが、9月1日に日本で関東大震災が発生。長谷川はその悲報を聞くと、ただちに予定を変更して帰国の途についた。この震災で渡辺の自坊西光寺は焼失し、彼は焼け残った芝中学校の校舎に仮住まいする。同時に、渡辺の計らいで住居を失った被災者に校舎を開放している。西光寺は長谷川にとっても大学本科3年のあいだ恩師と起居を共にした汗と涙がしみ込んでいた寺だが、翌年に伽藍の復興を果たした。

*

帰国後、24年には宗教大学教授に昇任し、矢吹に替わって社会事業研究室主任となる。この年の担当科目

は、「隣保事業」「社会事業演習」「労働問題」の三つで、名実ともに同大学社会事業の教育研究の中軸を担うこととなった。一方、自ら経営するマハヤナ学園に関しては、留学時における欧米女性の教養の高さや職業的自立の状況に学ぶところがあって、「大乘女子学院」を創設し、渡辺に院長を頼み隣保事業の延長として勤労女子の教育に乗り出した。この時渡辺は「財団法人大乗学園」の監督兼常務理事に迎えられ、同院は翌年「巢鴨家政女学校」（東京府知事認可の乙種実業学校。経済的な理由で高等女学校に進めない女子を対象に、実務教育・職業教育を施す授業内容）へと発展的に改組された。

25年6月、35歳の長谷川は渡辺の媒酌によって、静岡県三島出身の教員経験もある小早川りつ子と結婚している。以来10年間、若くして倒れた妻りつ子と共に社会事業と教育に邁進するのであった（詳細は米村美奈『長谷川りつ子・長谷川よし子』、大空社、2017年）。

26年、宗教大学は大正大学と改称され、引き続き教授として社会事業研究室主任を兼務。しかもこの年、渡辺との共著『社会問題と宗教思想』を大東出版社から刊行している。本書はまさに仏教界待望の理論的解答書というべき成果だが、渡辺がいかに長谷川を信頼し、かつその学問的力量に期待していたかを如実に物語る師弟渾然一体の共同作業といって過言ではないだろう。本書の「はしがき」に目を向けると、

今「社会問題と宗教思想」といふ与へられたる題目の下に若干の講解を試みやうとするに当って、先づ此の題目の提示せられた理由が那邊にあるかを思索することは、之が叙述を進めるに必要な用意であらうと思ふ。

との書き出しに始まり、以下、一見全く概念の異なる両者の関係を検討するなどの外的外れのようなが、よくよく考えてみると、「万有の相関は汎ねく一切の弧在、独存を許さざるが如く、況んや社会と宗教とはそこに発生的にも過程的にも緊密なる関係」があるのだとし、「殊に現代社会問題の本質が少くとも現存秩序に於ける人類の闘争、社会の疾病を意味する」もので、また「宗教の本質が、人類社会に対する形而上的示命を職分とする」ものであるならば、「現世紀の最大なる悩みとしての社会問題」すなわち「階級闘争や社会疾病」に対して、宗教の「救済の原理」をもって「融合の規範」を示し、「此の大いなる社会的暗礁を乗り切らうとする」ことは「現代人共通の希念」ではないだろうか、と本題の趣旨を披瀝している。そして、

右の考案に基き、本稿は最初渡辺一人執筆の予定であった。然るに起稿に際し、同人は種々複雑なる事情に妨げられ専心起草の暇を失ったため、其蒐



巢鴨女子商業学校の開設（昭和6年・1931）
前列中央に長谷川良信と渡辺海旭が並ぶ

淑徳巢鴨中等学校所蔵

集した材料の按排整理及び叙述論断の殆んど全部を挙げて、之を長谷川良信に委託し、長谷川は終始これにつき渡辺と協議して章段の分料各項の説述に努力し、漸くにして兩人合名の下に、本稿の責を塞ぐこととした。

と、共著に至った経緯と師弟による共同作業の分担等が記されている。仏教学の泰斗と近代社会事業の実践的リーダーとの共著であるところが意義深い。

翌27年10月、長谷川は「正法正義の国家社会」の建設といった歴史意識をベースに『新訳・仏教護国経世諸経』を世に問うている。これは21年、渡辺が監修者となり門下生を督励して『現代意識仏教聖典叢書』全12巻（甲子社）の刊行を計画したうちの一冊でもある。

さらに28年3月、大東出版社から自著『労働運動および無産者政治運動』を刊行。本書はこの年から長谷川が編纂に着手した『社会政策大系』全10巻（社会政策・社会事業・社会問題等の第一線の研究者の協力を得ている）のうち第4巻に収められた論稿を別冊としたものである。なお前掲『社会問題と宗教思想』も同大系の第10巻に収録され、30年には全巻の完成を見ている。本叢書が渡辺門下の高弟で長谷川の友人・岩屋真雄が社主を務める大東出版社から刊行されているところを見ると、研究者としての長谷川を引き立てようとする渡辺の配慮が察せられる。

31年4月、長谷川は先の巢鴨家政女学校を発展的に財団法人大乗学園「巢鴨女子商業学校」（文部省認可の甲種実業学校）に組織変更し、本格的な女子実業教育に乗り出した。その意気込みは初代校長に恩師の渡辺を迎え、自らは校主に就いていることからもうかがわれよう。ところがその2年後の33年2月、恩師・渡辺海旭は忽然として遷化した。

渡辺と長谷川、この師弟の関係について、社会事業史研究の第一人者吉田久一は次のように述べている。

長谷川は海旭の自坊西光寺に寄寓し、学問研究にとどまらず、海旭の日常生活における所作に至るまで影響をうけるという風であった。海旭はたんに研究者・教育者・社会事業経営者ばかりでなく、一個の思想家でもあった。(中略) 長谷川のいわば少青

年期の原初的資質が、海旭を待って整序されて行くのであるが、この師弟の出会いほど、思想的にも実践的にも妙を得た例はあまりないといってよいであろう。

(『長谷川良全集』第2巻所収の吉田の解説)

平成29年度淑徳大学アーカイブズ特別展

『『老い』へのまなざし —国家と家における高齢者福祉の歴史—』を観て

早稲田大学大学史資料センター 非常勤嘱託
北浦 康孝

「人生80年」と言われて久しいが、近年では「人生100年時代」という言葉までが登場するようになった。社会福祉の増進を建学の目的に掲げる淑徳大学にとって、高齢者福祉のあり方を研究し、その実践を担う人材を育成することは今後ますますその重みを増すであろう。社会の高齢者観とその福祉の担い手を主題とした特別展『『老い』へのまなざし—国家と家における高齢者福祉の歴史—』は、まさに時宜になかった企画であった。

展示は、古代・中世の「老い」(第一章) / 近世の「老い」(第二章) / 近代の「老い」(第三章)の3章から構成され、人知を超えた神の世界に近い存在、人生経験を重ねた理性的な存在といった高齢者観が、多様な史料に即して明らかにされていく。また、家族制度の成立とその庶民層への広がりにより、高齢者の扶養が大家族・地域共同体を背景とした近親者から、家を中心とするものへと移行していくこと、それぞれの時代に儒教的な孝行が政策的意図をともなって説かれてきたことなどが、3章を通じて論じられる。

第一章では、「令義解」「続日本紀」「大鏡」「枕草子」「徒然草」「日本霊異記」などの古典作品を通して、そこに描かれた「老い」のあり方が次々と読み解かれていく。史料のデジタル画像を用いたパネル展示のため、派手さはないが、その内容の面白さとわかりやすい現代語訳で、じっくりと読ませられる。担当者の内容に対する自信が感じられた。第二章では、古文書を中心に、金石文や民間習俗(黒川能)など、多種多様な史料が紹介されて、観る者を飽きさせない。また、第三章では、困窮高齢者救護施設・養育舎の関係文書が出色であった。

養育舎は1871(明治4)年にすでに規則を制定しているというから、その先駆性に驚かされる。古代から明治まで、その内容に惹き付けられて、時間を忘れるように、「老い」をめぐる通史を堪能した。

一方で、本展示は、その終点を近代的な社会福祉制度の端緒とされる救護法(1929(昭和4)年制定)に置いたため、福祉国家の形成、老人福祉法の成立から介護の社会化、超高齢化社会といった、救護法から現在までの問題は取り上げられていない。この点は、惜しく感じられた。いうまでもなく、現代こそ高齢者福祉のあり方が大きく変化した時代である。また、そこを対象とすることで、自らの所蔵史料の利用や、学園・大学の歴史と呼応させた展示叙述もなし得たであろう。より一層、淑徳大学のアーカイブズらしい展示が可能になったのではないだろうか。ぜひとも、今後に期待したい。

「老い」へのまなざしとは、「老い」といかに向き合い、どう生きるかということである。社会学者の天野正子は著書『老いの近代』(岩波書店、1999年)の中で、近世社会を念頭に、「しばしば不合理で劣った社会とみなされてきた明治以前の社会に、私たちは老いを生きる豊かな知恵を発見できるかもしれない。」と述べているが、本展示はまさに、古代から明治までという非常に長い歴史を射程に入れて、それを試みたものであったといえよう。多くの来場者にとって、「老い」を改めて見つめ直す機会となったのではないだろうか。もちろん、私もそのうちのひとりである。本稿執筆の機会を与えて頂いたこととともに、末筆ではあるが、お礼を申し上げたい。

『浄土宗関東十八檀林 大念寺日鑑』 — (淑徳大学アーカイブズ叢書7) 刊行のお知らせ

当アーカイブズでは、〈淑徳大学アーカイブズ叢書〉1～6の『高瀬真卿日記』に引き続き、平成29年度から『浄土宗関東十八檀林 大念寺日鑑』の刊行を開始いたしました。大念寺は茨城県稲敷市江戸崎に所在する浄土宗の寺院です。淑徳大学設立の因縁深い浄土宗大巖寺と同じ関東十八檀林として知られています。大念寺には江戸中期以降の古記録が豊富に所蔵されています。今回刊行された大念寺の日鑑を紐解くことに

よって、檀林寺院をとりまく様々な側面がこれから明らかになっていくでしょう。

本巻には、冒頭に長谷川匡俊氏（本アーカイブズ所長・淑徳大学名誉教授）による解説に続いて、享保11年～14年（1726～1729）・天明2年～9年（1782～1786）・寛政10年～文化2年（1798～1805）・文化6年～10年（1823～1827）の時期の日鑑5冊分の翻刻が掲載されています。

刊行日 2018年3月20日
書誌情報 本文290頁、A5判
価 格 本体3,000円+消費税
取扱い 株式会社ディーエスサービス
〒174-8645
東京都板橋区前野町5-5-2 大乘淑徳学園法人本部ビル内
TEL 03 (5392) 0081
問 合 せ 淑徳大学アーカイブズ
〒260-8701
千葉県千葉市中央区大巖寺町200 淑徳大学内
TEL 043 (265) 7526 (直通)



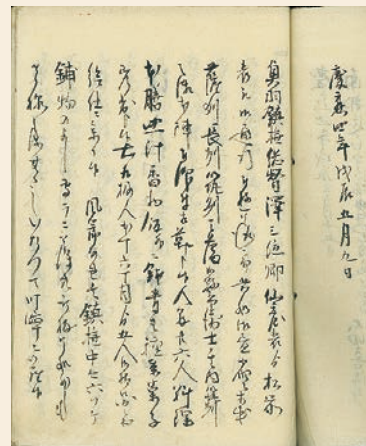
「淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会」のご案内

— 参加者を募集しています —

淑徳大学アーカイブズでは、地域の方々との交流を深めるため、「古文書に親しむ会」を開催しています。内容は、当アーカイブズが所蔵している史料をはじめとして、江戸時代から近代にいたる史料を幅広く読みながら、当時の社会や地域について学んでいこうというものです。

会は毎月第2・第4金曜日の午前10時からお昼頃まで、淑水記念館で開催しています。初心者の方も大歓迎です。くずし字が読めるようになりたい方や昔のことに興味のある方はどなたでも参加できます。ぜひ当アーカイブズまでご連絡下さい。皆さんで楽しく史料を読んでいければと思います。

〈問い合わせ・申し込み〉 淑徳大学アーカイブズ
TEL 043 (265) 7526 〈直通〉



淑徳大学アーカイブズ日誌 (2018年1月～5月)

- 1月6日 マハヤナ学園所蔵資料目録チェック作業（於マハヤナ学園撫子園）。
- 1月10日 2017年度第9回淑徳大学自校教育研究会出席（於東京キャンパス）。
- 1月12日 学園の文書管理システム構築の打ち合わせ（於アーカイブズ事務室）。
- 1月22日 マハヤナ学園所蔵資料目録チェック作業（於マハヤナ学園撫子園）。
- 1月24日 全国大学史資料協議会第108回東日本部会研究会参加（於国際基督教大学）。
- 1月26日 第128回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
- 1月27日 2017年度第8回福田会育児院史研究会出席（於専修大学神田校舎）。
- 2月6日 マハヤナ学園創立100周年記念誌作業および打ち合わせ（於マハヤナ学園撫子園）。
- 2月8日 学園の文書管理システム構築についての打ち合わせ（於アーカイブズ事務室）。
- 2月9日 第129回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
- 2月14日 神戸大学教授梅宮弘光氏円形校舎の調査のために来室。
- 2月15日 2017年度第9回福田会育児院史研究会出席（於福田会広尾フレンズ）。
- 2月16日 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会第294回定例研究会開催（於千葉キャンパス）。
- 2月17日 千葉・関東地域社会福祉史研究会2017年度第2回運営委員会開催（於マハヤナ学園撫子園）。
- 2月19日 2017年度第2回淑徳大学アーカイブズ運営委員会開催（於学園本部理事室）。
- 2月20日 『千葉関東地域社会福祉史研究』第42号発行。
- 2月20日・21日 茨城県稲敷市浄土宗大念寺日鑑原本校正調査（於大念寺）。
- 2月22日 総合福祉学部田中一彦教授より報告書・書籍・紀要等寄贈。
- 2月23日 第130回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
- 2月24日 学生サークルFeelsより資料寄贈。
- 3月5日 学生サークル弓道部より資料寄贈。
- 3月6日 コミュニティ政策学部田中秀親教授より書類・報告書・書籍・紀要等寄贈。
- 3月9日 第131回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
- 3月10日 マハヤナ学園100周年記念誌編集委員会出席（於マハヤナ学園撫子園）。
- 3月15日 全国大学史資料協議会第109回東日本部会研究会参加（於明治大学駿河台キャンパス）。
- 3月16日 看護栄養学部のMaking Project in Shukutokuより資料寄贈。
- 3月19日 コミュニティ政策学部齊藤保昭教授より「Ghiba University Press」（千葉日報）ほか寄贈。
- 3月20日 淑徳大学アーカイブズ叢書7『浄土宗関東十八檀林大念寺日鑑』一刊行。
- 3月23日 第132回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
- 4月5日 朴雁総合福祉学部元教授より天津大学語学研修関係書類等寄贈。
- 4月13日 第133回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
- 4月13日 コミュニティ政策学部矢尾板俊平准教授・松野由希助教と学生19名特別展見学。
- 4月14日 早稲田大学大学史資料センター北浦康孝氏特別展見学。
- 4月16日 千葉市中央区白旗町内会・さくら会（白旗老人クラブ）特別展見学。
- 4月16日 学祖展示室に学祖の衣装の展示ケース設置。

4月21日・22日	日本アーカイブズ学会 2018 年度大会参加（於東洋大学白山キャンパス）。
4月23日	マハヤナ学園所蔵資料目録のチェック作業と創立100周年記念誌の打ち合わせ（於マハヤナ学園撫子園）。
4月27日	総合福祉学部山口光治教授と学生展示見学。
4月27日	総合福祉学部米村美奈准教授と学生 18 名展示見学。
4月27日	第 134 回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
5月 9日	総合福祉学部池畑美恵子准教授と学生展示見学。
5月11日	第 135 回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
5月11日	総合福祉学部結城博康教授と学生 20 名展示見学。
5月11日	総合福祉学部村上信教授と学生 18 名展示見学。
5月11日	高校教員対象淑徳大学説明会キャンパスツアー参加者学祖展見学。
5月11日	マハヤナ学園所蔵資料目録チェック作業（於マハヤナ学園撫子園）。
5月11日	コミュニティ政策学部鏡論教授・野田陽子教授と学生 16 名展示見学。
5月11日	マハヤナ学園所蔵資料目録チェック作業（於マハヤナ学園撫子園）。
5月12日・13日	日本社会事業史学会第 46 回大会参加（於東洋大学白山キャンパス）。
5月18日	大学職員菅谷厚子氏より名簿等の資料寄贈。
5月18日	マハヤナ学園創立 100 周年記念誌編集委員会出席（於マハヤナ学園撫子園）。
5月19日	学園の文書管理システム構築について打ち合わせ。
5月19日	2018 年度第 2 回福田会育児院史研究会出席（於広尾フレンズ）。
5月23日	福田会育児院史研究会資料整理（於広尾フレンズ）。
5月24日	渋沢史料館視察。
5月25日	第 136 回淑徳大学アーカイブズ古文書に親しむ会開催。
5月26日	小金井市文化財センターに昨年度特別展で借用の資料返却。
5月27日	早稲田大学歴史館ほか早稲田大学構内の博物館視察。

淑徳大学アーカイブズでは、 大学及び大乘淑徳学園に関する資料を広く収集しています。

- ① 大学及び学園が発行した新聞・雑誌・広報誌・年報・報告書等。
- ② 学生時代の写真・講義ノート・教科書・手帳・日記・記念品・記事・各種書類等。
- ③ 学生時代に使用していたもの。
- ④ 大学及び学園のサークルや研究会の活動を示すもの。

上記以外の物でも結構ですので、お気づきのものがあればお気軽にご連絡下さい。

また、大学及び学園の各部署や学部学科、機関で保存期間の満了した文書、あるいは廃棄の対象となる文書が発生した場合は、大学アーカイブズまでご一報下さい。



淑徳大学
アーカイブズ・ニュース 第17号

NEWSLETTER of
SHUKUTOKU UNIVERSITY ARCHIVES

発行日：2018年（平成30）6月28日

編集・発行：淑徳大学アーカイブズ

〒260-8701 千葉県千葉市中央区大巖寺町200

TEL 043-265-7526（直通）

e-mail : archives@soc.shukutoku.ac.jp